

ことばの迷い道

エジプトのIBM

すえもり かおる
末森 薫
民博 機関研究員

紛糾した打合せの終わりであった。もち越しとなった検討事項について「明日こそは決めましょう」と語気を強めて伝えた。すると、エジプト人の同僚が「IBM」と応えた。自身のパソコンはF社のものであるし、その瞬間は何を言っているのかわからなかった。不可解な顔をしていると、エジプト人の同僚はにこやかに「Inshallah Bokra Maalesh（インシャッラー・ボクラ・マーレシユ）」と呟いた。アラビア語は片言しかわからなかったが、よく耳にする単語の訳を頭のなかで並べた。神が望むなら、明日、ごめん。

アラビア語圏を訪れたら一度は耳にするであろう「インシャッラー」。唯一神・アッラーが望むのであればそうなるであろう、といった意味合いである。ポジティブにとらえれば「神に身を委ねる」ということになるが、自身の責任を問われない「神頼み」といった側面もち合わせる。二〇一一年に起きたアラブの春の直後、組織を仕切る立場の人たちからこのことばを耳にする機会が増えた。若者や部下が自由に発言できる雰囲気なのか、責任を負う行動をなるべく避けようとする風潮が蔓延まんえんしていたのである。

「ボクラ」は「明日」を意味する。退勤時のあいさつその他、予定していた事柄が片付かず、翌日にもち越すときなどにもよく耳にした。翌日に片付いたら上出来であり、その次の日、さらにその翌日、場合によっては翌週、翌月に事が先延ばしされることもしばしばあった。ボクラが明日に限らず、今日よりも先の未来を広く含んでいることに気づき始めたのはエジプトに着任して間

もないころであった。一方、普段は先延ばしにしがちなエジプトの同僚であったが、期日が間近に迫ったときのボクラは信用できた。準備不足で開催が危ぶまれていたシンポジウムも、当日になると不思議と体制が整っていた。追い込まれたときの彼らの爆発力は凄まじい。

「マーレシユ」は、「ごめん」「気にしないで」「お気の毒」「残念」といった謝罪や同情を示す便利なことばである。ただし、謝罪の場ではその使用に注意が必要なきがある。ややフランクな表現であるためか、本気で謝罪していないと誤解を招いてしまう場合もあった。伝え方の問題の方が大きいかもしれないが。

エジプトのIBMは「神に（責任を）委ねてみましょう。そうしたら明日（あるいは明日以降の将来）にはなんとかなるかもしれません。ただ、そうならなくても気にしないでね」といくつもの予防線が張られた寛大な略語なのである。日本で使用したならば呆あきれられるか、激怒されるかもしれない。ただ、エジプトで暮らすうえで、エジプト人の気質が凝縮されたこの略語の深意を知ることが不可欠であった。紛糾した場の雰囲気も「IBM」で和らぎ、わたし自身もストレスをためず、少し余裕をもって構えることができたのである。ただし、物事の進展具合は相変わらずであつたが……。



IBMをしるした土産物のマグネット
(撮影：鈴木淳)